

## まとめ

さて最後に、南京事件とは何なのか改めて纏めてみよう。発信源のアメリカ宣教師団を中心に纏めると良  
く分かる。

①そもそも、彼らアメリカ宣教師団が南京戦時に南京に残留して、南京安全区を設立した真の目的は、  
市民保護ではなく、中国軍の支援であった。

②その背景には、1937年5月にプロテスタント教会の総意として決議した、蒋介石の実質的な建国政  
治活動である「新生活運動」への支援要請があった。

③南京安全区にてアメリカ宣教師団は中国軍を約束通り支援したが、日中双方から公認された上海安  
全区とは異なり、中立性に疑義があり日本側から承認されなかった非公認の南京安全区は、戦闘後は  
存在する理由が無かった。そこでアメリカ宣教師団は、安全区を維持し中国軍を支援し続ける為に、日  
本軍による恐怖統治からの市民保護という役目、つまり「南京事件」からの市民保護を創作・主張する  
必要があった。

つまり、南京事件の発信源であるアメリカ宣教師団は善意の第三者ではなく、どうしても物語を作り出す  
必要のあった当事者である。それゆえ、宣教師たちが発信した「南京事件」は事実とはまったく異なるもの  
であった。これが「南京事件」の真実である。

※戦後の中国による宣伝は、既に多くの研究があるので本書では省略させて頂く。ただ、毛沢東は南京事件を取り上げて、日本を非難することは一度もなかったことを指摘しておく。本書で証明したように、南京事件の実態は、蔣介石とアメリカ宣教師団が結託した集団詐欺である。南京事件で日本を非難することは、蔣介石の策略を称賛することになる。蔣介石と犬猿の仲である毛沢東は、当然の事ながら、相手にしなかったのである。

## 南京事件一時系列整理

<プロテスタントが蒋介石支援を決定するまで>

1934年2月 蒋介石が南昌にて新生活運動開始

・その後蒋介石の政治上のライバルが次第に失脚（1935年12月汪兆銘行政院院長辞任。1936年5月胡漢民急死）

1936年12月 西安事件発生。蒋介石が共産党側に拘束される。宋美齡（蒋介石夫人）等の仲介を基に、釈放

1937年3月 聖金曜日（復活祭の前々日）に、南京のメソジスト教会の会合に、蒋介石が、西安事件での拘束時における信仰告白を送付。プロテスタントたちの間で蒋介石への熱狂が起こる

1937年5月 全国基督教連盟の総会において、宋美齡の呼びかけに応える形で、蒋介石の「新生活運動」への、個人・組織を問わない全面的支援を決議（=蒋介石の建国政治活動への全面支持）

<「安全区」というアイデア>

1937年8月13日 第二次上海事変勃発

1937年11月9日 カトリックのジャキノ神父が上海安全区を創設。日中の合意により正式発効。松井大將は1万円を寄付。中国側からの寄付は特に記録なし

<中国軍支援保護の為の南京安全区設立>

1937年11月18日 南京にて、南京安全区の創設計画をプロテスタント宣教師内部で報告。その際、安全区発案者のミルズ宣教師により、中国軍支援保護の意思が表明される。同日、蒋介石の腹心であり、「新生活運動」促進総会の総幹事である黄仁霖氏に対し、このミルズ宣教師のプランを通知

1937年11月19日 アメリカ宣教師団を中心に、国際委員会結成。22日ドイツ人ラーベ氏を委員長に担ぐ。日本に対し安全区設立を提案

1937年11月29日 蒋介石が南京安全区国際委員会に対し、10万ドルの寄付を表明（ラーベ日記より）

1937年12月2日 日本側は南京安全区の不承認を通知

1937年12月10日 南京城総攻撃開始

1937年12月13日 日本軍南京城入城。入城後の日本軍からの難民区解散要請をアメリカ宣教師団は断固拒否

#### <南京安全区が存在と共にある「南京事件」>

1937年12月15日- バイツ宣教師の声明を基に、「南京事件」が南京を離れた記者たちにより発信される。以後、国際委員会を通して、または宣教師個人で、安全区が存在を正当化する様々な「南京事件」報告を発信。並行して安全区内で中国兵の支援保護を実施

1938年2月4日 日本軍が半強制的に難民を帰宅させる。安全区（難民区）は実質的に解散。

1938年2月18日 南京安全区国際委員会改称（以降国際救済委員会）

1938年2月23日 委員長のラーベ氏が南京を離れる

1938年3月4日 南京の治安回復を確認（ドイツ大使館シャッフエンベルク氏）

#### <アメリカ宣教師団と中国側の「南京事件」共同宣伝>

1938年2月 国際連盟会合にて中国代表顧維鈞氏が同年1月28日号『デイリーテレグラフ・アンド・モーニングポスト紙』に掲載の、ある宣教師の証言を基に日本軍による2万人の市民虐殺を訴える

1938年3月 宣教師フィッチ氏が中国側の支援の下、アメリカで南京事件を宣伝旅行開始

1938年7月 『戦争とはなにか』アメリカ・イギリス・中国で刊行

1938年7月 リーダーズ・ダイジェスト（米）に『南京の略奪』掲載（フィッチ氏の記録）

1938年10月 リーダーズ・ダイジェスト（米）に『我々は南京にいた』掲載（ベイツ氏・ウィルソン氏・フィッチ氏の記録）

1938年10月頃 『南京地区の戦争被害』上海にて刊行（英文）

1939年3月 『南京安全地帯の記録』上海にて刊行（英文）

#### <日米関係・東京裁判>

1941年12月8日 日米開戦

1945年8月15日 終戦（玉音放送）

1946年7月15日- 東京裁判にて、南京事件の審議開始。検察側証人として、宣教師のウィルソ

ン氏、ベイツ氏、マギー氏が順次出廷して証言。

1948年11月12日 東京裁判にて、南京戦責任者の中支那方面軍司令官松井石根大将に死刑判決

## 【引用文献】

引用文献は、基本的には、文中で示したが、度々引用するものについて、簡略表記で引用元を表した。

対応は以下である。

ラーベ／シャッフエンベルク：John Rabe, *Der gute Deutsche von Nanking*, 1997, DVA Erwin

Wickert [参考] *南京の真実* 講談社 (1997) エルヴィン ヴィツケルト(編集), 平野 卿子(翻訳)

ヴォートリン：Diary of Wilhelmina Vautrin 1937-1940, Yale Univ. [参考] *南京事件の日々-ミニ-*

ヴォートリンの日記 大月書店 (1999)

コヴィル：Diaries of Cabot Coville 1938, Hoover Institution Archive. [参考] *カボット・コヴィルの南*

京旅行記『南京事件資料集 1 アメリカ関係資料編 青木書店 P110-121』

特務機関報告：南京「虐殺」研究の最前線 日本「南京」学会年報 平成 16 年版 (2004)

南京安全地帯の記録：Documents of the Nanking Safety Zone, 1939, Kelly and Walsh [参考]

「南京安全地帯の記録」完訳と研究 展転社 (2004) 富沢 繁信

\*Yale : Yale Divinity Library, The Nanking Massacre Archival Project

※1 引用元が外国語表記のもので、特に記載がない場合は、著者による翻訳である。

※2 引用文中の下線、()は著者の挿入である。

※3 [参考]の日本語訳（南京の真実・南京事件の日々）には、本書での引用部分が、一部採録されていないため、確認の際には注意されたい

※4 既存の日本語訳を引用する場合でも、固有名詞の表記は著者の責任で全体の統一を図った。